

論文内容要旨

報告番号	甲 総 第 21 号	氏名	香川 哲
学位論文題目	投棄されるトリガイを種苗に使うコンパクト養殖の研究		
<p>内容要旨</p> <p>水産業有用種であるトリガイについて、小型底びき網の混獲物として多量に投棄されている実態や投棄されたトリガイの状態を明らかにした上で、このトリガイ（以下、混獲トリガイという）を養殖種苗として使う養殖について技術開発を行い、また、採算性についても検討をした。初期投資を抑えるために漁業者がすでに保有している漁業資材を用いるなどの工夫をし、瀬戸内海に多く存在する低利用な漁港を活用策して安全な場所で、高齢者や女性が実施する副業的な養殖（以下、コンパクト養殖という）をめざした。燧灘海域で操業する小型底びき網漁船に乗船した調査をし、養殖方法の技術開発試験を行い、低利用漁港である観音寺市室本港での実証試験を実施した。</p> <p>第1章 トリガイの混獲と投棄</p> <p>底びき網のうち、戦車こぎ網はトリガイが殻を損傷する個体が多く、種苗を確保するにはえびこぎ網が漁法として適していた。また、燧灘では、9月以降になると漁獲数は減少するものの1網当たり4～99個の投棄トリガイが漁獲されることから、海域で操業する漁船全隻から1日あたり総計36千個の種苗が確保できると推計できたので、養殖種苗の確保が可能である。</p> <p>第2章 混獲トリガイを種苗とする条件</p> <p>混獲トリガイの生残には、殻の損傷度合や季節が影響しており、殻が強く破損すると生残率が低下すること、破損していない個体でも夏季には生残率が低い場合があることが明らかとなった。また、長期間飼育実験から、養殖用種苗には破損が無い個体とひび割れ程度の破損個体を選択すべきであり、殻が欠損している個体は適さないことが判明した。</p> <p>第3章 香川県沿岸におけるコンパクト養殖の可能性</p> <p>混獲トリガイを使う養殖試験の結果、成長や生残率から、水温が25℃を下回った9月下旬から水温が℃を超える翌年7月の期間に実施するのが良いと判断された。</p> <p>第4章 低利用の漁港で実施するコンパクト養殖技術の開発</p> <p>漁港で2回の養殖試験を実施したところ、へい死率は27、34%とやや高いものの、養殖トリガイのうち93、75%が出荷サイズに達し、コンパクト養殖は本研究で明らかにした方法により技術的に可能と考えた。</p> <p>第5章 混獲トリガイを種苗として使うコンパクト養殖の採算性</p> <p>養殖実証試験の結果、1個当たりの生産原価は79円で所得率41%、投下労働時間対所得率（労働生産性）は554円/時となった。価格や所得には課題は残ったものの、今後、これらの問題点を改善することによって、混獲トリガイを利用したコンパクト養殖は副業として成立すると判断した。</p> <p>第6章 トリガイのコンパクト養殖方法の提言</p> <p>小型底びき網漁業の副業として収益の向上、未利用資源の有効利用、低利用となっている漁港の活性化対策及び当該地域の高齢漁業者対策や女性の活躍の場として、漁港内の静穏水域を使うコンパクト養殖のガイドラインを示した。</p>			